

「小さな親切」運動を広げる絶好の機会がやってきた

50年にわたり、一つの活動が続いてきたというのはいすごいことです。これはやはり、茅誠司初代代表の説かれたことが核心を突いていたからのことです。茅先生は物理学が専門ですから、真理を見極めるといいう能力に長けておられたのだと思います。

問題が多数おきています。高齢化社会となり、弱者は増えていく一方ですし、東日本大震災を契機としてコミュニティのあり方も問われています。

「小さな親切」運動はそれら全ての解決となりえます。



原禮之助 顧問を偲んで

前副代表で顧問の原禮之助氏(90歳)が、昨年11月2日永眠されました。

茅誠司初代代表の教え子であり、「小さな親切」運動の原点を伝える唯一の存在であった原顧問は、一歩先の親切運動を提唱された方でもありました。謹んでご冥福をお祈りし、珠玉の言葉をお届けします。

「小さな親切」実行章の授与やあいさつ運動、作文コンクールなどの活動は、「小さな親切」運動のコアです。確かなコアを持っていることは、当運動の強みです。

今の時代に「親切」を広めることは難しいのではないかと、いろいろな意見があります。私の考えは真逆です。今ほど「親切」が求められている時代はありません。「いじめ」「家庭内暴力」「パワハラ」など、人の心に起因す

いたしまして』といいたしましょう。」とあります。茅先生が提唱された時代なら、これでよかったです。現代の子どもたちには照らしてみますと、少々違和感があるのではないのでしょうか。まさか「ウッソー」「マジ」でもないでしょうが、子どもたちが無理をしないで口に出せる言葉を考えてあげてほしいです。

次に、科学技術の進歩の活用を考えてみましょう。

「人から『ありがとう』といわれたら、『どうも』と返すのが、次代に必要です。50年の間に古くなってしまえば、時代はそぐわなくなりました。それは改良し、新しく誕生した技術や環境にも適応しなくてはなりません。

例えば、「小さな親切」八か条の第四条に、「人から『ありがとう』といわれたら、『どうも』と返すのが、次代に必要です。50年の間に古くなってしまえば、時代はそぐわなくなりました。それは改良し、新しく誕生した技術や環境にも適応しなくてはなりません。

「小さな親切」アプリがあってもいいでしょう。あいさつができれば、一回画面をタップすると画面上には、どんどん自分の街が広がっていく。町で見かけた親切さんをスマホでレポートすると、レアなアイテムがゲットできる。「こんなとき、どうしよう?」というクイズがあってもいい。子どもたちは遊びながら、適切な行動の具体例を学べるではないですか。

いずれにせよ新しい技術を駆使して、価値を生み出していく工夫が必要な時代だと感じています。

「小さな親切」誌49号50周年記念特別号抜粋

原禮之助(はら・れいのすけ)

1925年生まれ。東京大学理学部大学院卒。理学部長の茅誠司氏から理学博士号を授与される。ルイジアナ州立大学講師、在ウィーン国際原子力機関研究副部長、セイコーインスツルメンツ(株)代表取締役社長等を歴任。1993年社団法人「小さな親切」運動本部理事、2004年副代表、公益社団法人に移行した2011年顧問に就任。その間、公益財団法人新世代研究所顧問、国連工業開発機関(UNIDO)の親善大使としても活躍。勲三等旭日中綬章、スウェーデン王国北極星勲章コマンドー・ファーストクラスなど多数受賞。2015年11月逝去された。